

KTK ひゅうまん 京都

No. 531 2021年2月号

編集／京都障害児者の生活と権利を守る連絡会 〒603-8324 京都市北区北野紅梅町85 弥生マンション内
編集発行責任者／池添 素 電話&FAX(075)465-4310 購読料 1部80円 年間購読料1,000円(送料実費)

- P 1 左大文字 つどめ
- P 2 常任委員会から 池添 素
- P 3 「ふつうのくらし」を求めて 大西里江
- P 4 血の染みついたパトン 中村 暁
- P 5 障害者と共に歩んだ京障連の50年 松本 美津男
- P 6 判決前に、判決風コラムを試みる。 和田 浩
- P 7 つれづれあらぐさ 中山 恵美子
- P 8 2+2=詩 赤富士文兼
- P 9 障害のある人の権利を守る北障連から 濱中 博
- P 10 365歩のマーチ 安藤 史郎
- P 11 知っ得情報 松本 美津男
- P 12 【悼】 さよなら 矢吹さん

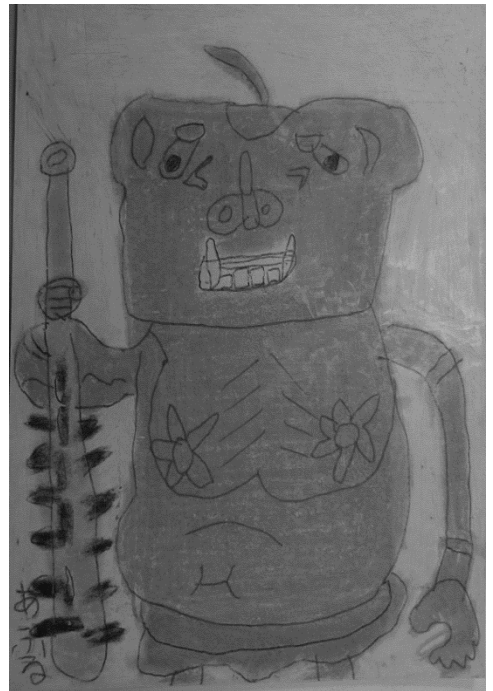
左大文字

「クソどうでもいい仕事」

コロナ禍で始まった今年▲世間ではテレワークなど新しい働き方も喧伝されているが、「エッセンシャル・ワーカー」という言葉も初めて知った。在宅で家族のケアを担うことも含めて医療・福祉・介護

に関わる仕事は、その場を離れる事の出来ない「現場」のある労働だ。医療や介護があるからこそこの社会と私たちの暮らしが維持できる。だから「エッセンシャル」だ▲昨年7月に翻訳本が発行されて話題を呼んでいる『ブルツシット・ジョブ』(デヴィッド・グレーバー、岩波書店)、「クソどうでもいい仕事の理論」と過激なサブタイトルで挑発している。社会のためになる仕事をしている「私たち」はなぜこんなに処遇が悪く、社会的評価が低いのか。「クソどうでもいい仕事」をしている「あの人たち」は、なぜあんなに高給とりなのか▲著者はあらゆる労働は本質的にケアリングだといっている。人のためになる、人の世話をする、ということだ。人の役に立たない労働、人を不幸にするような仕事は労働ではないということにもなる。その仕事がなくなってもだれも困らない。むしろ無くなった方が世のため人のためになる仕事でもある。コロナ対策の巨額の政府資金を中抜きで暴利を貪っていた一般社団法人など悪例に事欠かない。だってその業務の実態も能力もなかったのだから、全くの「クソ」だ▲以前には全く意識されることもなかった事実だが、コロナ禍が気付かせてくれた。

つどめ



「鬼も内」
渡辺あふる

常任委員会から

〈たくさん一緒に闘いました〉

「日本自立生活センター代表 矢吹文敏、昨年末から入院し復帰を目指して闘病生活を続けていましたが、2月2日（火）0時16分、呼吸器不全により享年76歳にて逝去いたしました。生前のご厚誼に心より感謝し、謹んでお知らせ申し上げます」と

けでなく、よくいろんな話をしました。一番印象的だったのは、なんか頼んだときに、「今ちょっと忙しい」と、私が「なんで？」と聞くとNHKの放送大学を講中でレポートを出さないといけないからと。70を超えてからの学びです。この意欲の高さに矢吹さんの生きる意識の高さを教えてもらいました。学ばせてもらったことはたくさんあります。私も若くはないですが、もう少し矢吹さんたちと創ってきた運動の道を広げていきたいと思えます。

〈わきまえない〉

森喜朗会長（前）の女性蔑視発言への怒りが広がっています。女も男もなく、人として許せないとの想いは、世界中から「わきまえない」人物となっています。ただこの方は、過去にも「わきまえない」発言をして、ご自分の値打ちを落としています。人間社会の常識や人としての品格を持ち合わせていないことはすでに明白。社会的な要職につけた日本社会の品のなさこそ問題です。一刻も早く森前会長だけでなく、オリンピック・パラリンピックの中止を決定し、コロナ対策にお金と知恵をまわす緊急の課題に取り組むことを「わきまえない」政治家は退場！

池添 素（京障連事務局長）

矢吹さんとの出会いは、悪名高い「障害者自立支援法」。障害福祉サービスを利用することを「益」とするこの法律は、障害者の生きる権利をないがしろにし、さらに障害の重い人の負担

京都でも、「障害者自立支援法に異議あり、応益負担反対」実行委員会を結成し、国会にも行き、京都市役所前から円山公園までのデモは何度歩いたかわからない。学習会や集会の企画もいつも一緒に考えてきた同志といたってもよいと思います。その時の『金ないモンから金とるな！』のスローガンは今でも色あせません。矢吹さんとは運動での交流だけ



「ふつうの暮らし」を求めて ⑭

大西 里江

〈いまを生きている〉

「ヒナギクの気持ち」というお話を聞いたことがあります。花壇にはいろんな花が咲いています。バラや石楠花のように大きく美しい花もあれば、ヒナギクのように小さく可愛い花もあります。ヒナギクは大きく人目をひく花にアコガレたりはしていません。そんなヒナギクをかわいそうと思って、切って花びんに飾って人目につくようにしても、ヒナギクは嬉しくありません。ここに咲いて、鳥のさえずりを聞くことや太陽の光をたくさん浴びることに喜びを感じている。ヒナギクはヒナギク、バラはバラ、それぞれ咲いているだけでいいのです。人間も同じです。

今この場にいられることが幸せなら、それでいいのです。花に水分を与え、その時々に応じて肥料を与える。人にとっては、水分や肥料は制度です。ヒナギクをかわいそうと思う気持ちはいけない。共に咲いていることを喜ばないといけない。人も共に過ごす時間を喜びと感じて、今を生きていかなくてはいけません。生きるために必要な制度が、しっかりとしていただたら不安もなく、多くの人と今を共有して生きていけると思っています。

〈かわりのゆく社会〉

今□□ナウイルスで大きく変わろうとしている社会。これからの社会が、声なき声を通る、見通しのある、不安のない社会になってほしいと思っています。人と接触することができない今、人と会うこともできない今、ネットで会話、交流す



る今、このままどう変わっていくのか？ネット社会となってもかわらない現場があります。育児、教育、医療、介護などの、人と人がかわっている現場です。人は産まれてからすぐ抱っこしてもらって、身体が不自由になったら身体を支えてもらうなど、人は人を支えて暮らしています。

〈娘が好きだったことは〉

七年前に旅立った娘は人が大好きでした。学校でもデイサービスでも必ず誰かに抱っこしてもらっていました。自宅でも一日五、六回は抱っこしていました。28年の障害で娘を抱っこしなかったのは、たったの三日だけで、今でも娘のぬくもりや香りや匂いは、はっきりと覚えています。

朝は五時に起床し、夜九時に眠る。必ず毎日お風呂に入り、湯舟につかるのが至福の時間だったようです。規則正しい生活を送り、敏感に人や物を五感で感じて生きていました。人間には五感があります。すべての五感を感じないと人は不安定になります。ネットでは、目で見る、耳で聞く、口で話すことができ、満足することは可能です。しかし、鼻で感じる匂いや肌で体温を感じることはできません。バーチャルが進んで可能になるかもしれませんが、微妙な二感人は人と接することではじめてわかる温度や香りです。

血の染みついたバトン

中村 暁（医療ジャーナリスト）

②720という数字

昨年末から新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）の感染者数が激増した。京都府でも連日100人を超える陽性者数が確認され、1月17日には154人を記録した。京都新聞が「入院できず死亡 京でも」と報じたのは1月16日。独居の80代の女性が入院待機中に重症化し亡くなられた。確かに大阪府や兵庫県での病床逼迫は報じられていた。だが、なぜ京都府で。この時期の府発表の確保病床数は720床（1月10日）。同日の入院患者は258人。病床利用率は35・8%で、まだまだ余裕があると思われる。

だが以前より、病院医師からは府発表への疑問が寄せられていた。だがコロナに関する医療

体制の情報はほとんど非公開事項で、720床を確保している

病院名もわからず、確かめる術がない。京都府保険医協会は1月13日、府知事に要請書を提出した。府の示す病床数は実態に比べて過大ではないか。本当の内訳を公表せよと。そして1月19日、府は記者会

見し「すぐに使用できる病床」が「330床」だと告白した。すぐ使用できる病床の利用率は82・7%（1月17日）。多くの医療関係者は驚くより先に「やはり」と思ったことだろう。これはとても恐ろしいことだ。府民には「まだ余裕のある数字」が知らされ、一方で病院は戦場さながらの修羅場と化していた。そしてついに自宅療養中の患者が亡くなるに至った。私たちが



「空」にして確保しただろう。それらのベッドの総数が720床なのかもしれない。だがベッドがあればいいというものではない。たとえばある病院が4人部屋を3室分で計12床を確保したとす

る。だが4人部屋に4人の患者を受け入れるとは限らない。個室対応が必要と判断すれば3室で3人しか受入れられない。それ以前に医師・看護師等、医療スタッフの体制問題がある。どこの病院もぎりぎりのスタッフ数で、非常事態に対応する余力などない。病床は確保されたが、それは実際に受け入れられるコロナ患者の人数とイコールではなかった。

行政の発する情報は行政自身がどのように現実を捉えているかを表す。同時に住民に対して何を伝えるべきと考えるかも。京都府は720床という数字を示し

続けてきたことで、府民に何を伝えようと考えていたのか。それとも何も考えていなかったのか。

障害者と共に歩んだ京障連の50年(2)

京障連代表委員 松本 美津男

結成後すぐに京都市との団体交渉を行い、1971年5月には(民主府市政の)府市会与党議員を交えての要求学習会、6月は代表者会議後にリハビリ学習会、参議院選における公開質問状の作成を行っています。

1974年には市内4カ所府下4カ所で地域懇談会を開催、1975年、京都市の重度障害者施設建設の問題で2回交渉、対府中央児童相談所交渉を3回行っています。

そして7月には京都の市電を守る会に入って京都市議会へ千本、大宮線撤去等再検討を要請する請願書を提出、加盟団体にも「守る会に結集し、広範な市民と共に運動をひろげましょう」(京障連ニュース)と呼びかけています。

また、メーデーに障害者実行委員会をつくって参加しました。

1972年10月、市立養護学校建設促進実行委員会が結成され、「障害者六法」出版記念の集いを全障研京都支部との共催で行いました。



名称決定にまつわるエピソード

会の名称決定はもちろん真面目に検討されたのですが、見ようによっては面白いものです。

加盟する全国組織、障害者の生活と権利を守る全国連絡協議会

の略称は障全協となっており、他の加盟地方組織もこれに準じた名称になっているところが多くあります。

・障害者と家族の生活と権利を守る都民連絡会(障都連)

・障害者の生活と権利を守る千葉県連絡協議会(障千連)

・障害者(児)を守る全大阪連絡協議会(障連協)

そこで、京都でもそれに準じた名称にしようかとなったのですが、少し問題が出てきました。

仮に、障害児・者の生活と権利を守る京都連絡会とすると略称は障京連になり、シヨウキョウレンという響きは当時問題になっ

ていた勝共連合を連想させ、あまり良くないとなったのです。

そのため京都を前にもっていくことにし、京都障害児・者の生活と権利を守る連絡会(京障連)と決まりました。

ただ、京障連という略称も京都では時々、「障害者団体の京障連」と自己紹介する必要があります。民主団体の集まりなどではキョウシヨウレンといえば民商の京商連の方が古く名が通っているからです。



判決前に、判決風コラムを試みる。

弁護士・和田浩

先月号で浅井弁護士が紹介されたとおり、ジョナさんの車椅子訴訟の第一審は、昨年12月14日の期日で弁論終結となりました。今後、京都地裁において、第一審判決が言い渡されることとなります。

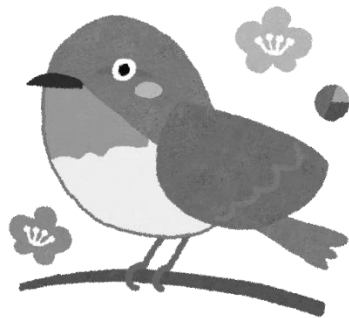
弁論終結から判決までの間は、訴訟活動を行う必要があります。そこで、今回は、訴訟活動についてではなく、判決についてご紹介してみたいと思います。

一般に、判決は「主文」と「事実及び理由」により構成されています。簡単に説明すると、「主文」には結論が記載され、「事実及び理由」には、裁判所が認定した事実と結論を導き出した考え方が記載されます。

決の「事実」において摘示するところである」などとされます。この説明ではわかりにくいと思いますので、試しに、私が先月号の浅井弁護士のコラムを、控訴審判決風に引用をしてみることにしませう。

「今月号の当職の見解は、次のとおり補正するほか、先月号で浅井弁護士に示された見解のとおりである。(先月号の補正)先月号下から5行目「裁判の判決は、2021年3月14日午後1時15分から京都地方裁判所の101号法廷で言い渡される」を、「裁判の判決は、2021年3月16日午後1時15分から京都地方裁判所の101号法廷で言い渡される」に改める」。

皆さん、重要です！ ジョナさんの判決は、3月16日です！先月号を読んで誤解されていた方は、手帳を修正してください。そして、3月16日午後1時15分には、ぜひ京都地裁101号法廷



にお集まりください！

というところで、今月は、控訴審(高裁)判決風コラムを作成してみました。次号では、弁護団の垣田弁護士が、最高裁判所判決風に、今月号の私のコラムを批評してくださいませんか。

つれづれあらぐせ

あらぐせ福祉会は長岡京市にある社会福祉法人で、障害のある人たちの暮らしを支える事業を行っています。1986年に無認可の共同作業所を開所して以降、日中の通所から生活の場、ヘルパー事業所等、地域で暮らし続けるために必要なものを作り出してきました。今回の連載開始にあたり、「障害者の喜びと悲しみ、家族の喜びと苦悩、職員の働き甲斐と先が見えない苦悩…そういうことが浮き彫りになればと思います」とお話をいただきました。日々自分が経験していることや感じていることを通して、それぞれの一場面を綴れたらと思います。なお、内容については個人情報に配慮して構成しています。

場面⑭ 緊急事態宣言で、

おでかけの中止を伝える

1月13日、新型コロナウイルス特別措置法に基づいて、京都府に再び緊急事態宣言が出されました。「不要不急の外出は控える」ということで外出の自粛が呼びかけられ、各事業所から外出支援サービス停止の連絡が入っています。

世の中の動きを察知したのか、宣言発令の数日前にやってきた彼。ずんずん部屋の中に入って来て勢よくイスに座ると、机の上の卓上カレンダーを手にとります。中旬を指して「お風呂」（両手で湯船につかっているポーズ）、月末を指して「キッチン」（フライドチキンにかぶりつくポーズ）を繰り返します。毎月出かけているスーパ―温泉とケンタッキーの予定確認でした。

普段なら一緒に確認するのですが、今回は明言できません。また、「この日はあかんけど、ここで行けます」とも言えません。「まだ分からへんし、聞いときます」「決まったら言うし」の返事に、「う〜」と不満そう。そんなやりとりを繰り返して、最終的には自分で「んっ」とうなずいて去っていききました。

最初の緊急事態宣言の時、外出の中止は担当職員が新型コロナウイルスや首相記者会見の写真を使いながら説明しました。首相を見て「知ってる」とご本人。納得はできないものの外出できないと知った彼は、カレンダーの予定を担当職員と一緒に貼り替えました。また、担当職員が見過ごしていた変更にも気づいて指摘があったそうです。

もともとは曜日の並びで一週間を把握していた彼ですが、経験を重ねる中でだいたい一ヶ月を見通すようになっていきます。盛りだくさんのシヨートステイや外出を楽しむに、カレンダーを手がかりにして生活する

ようになりました。心待ちにしていく分、あるはずの予定がないのが諦めきれません。

中止になっても「おでかけの用意してほしい」と訴え、時には職員に八つ当たりすることもありました。活動中のため息を連発しながら、「仮面ライダーのベルトあるし」と気持ちを立て直そうとする姿も見られました。相次ぐ中止を伝える度、後ろにひっくり返ったりうずくまったりする彼を「行きたかってんなさ今日は家でキラメイジャー（戦隊ヒーロー）やな」と励ましています。「誰かが行けるって言うてくれるかも」といろいろな職員に聞いては、「お願い」と手を合わせたり、がっくりうなだれたり…またしばらく、そんな日々が続きそうです。

中山 恵美子（あらぐせ福祉会）



2+2=詩

「気持ちの花」

心の畑の心の土に今日も気持ちの花が咲きます

嬉しいことがあったから喜びの花が咲きました

ふわりふわりとほころぶように

優しい緑の花が咲きました

腹立たしいことがあったから

怒りの花が咲きました

まるで針山のようにぎらぎらと棘をはやした

燃えるような真っ赤な花が咲きました

悲しいことがあったから哀しみの花が咲きました

ぶるぶる震えて絞り出すように水をこぼす

沈んだ青い花が咲きました

楽しいことがあったから楽しみの花が咲きました

鼻歌のような音立てながらゆらゆら揺られて踊ってる

明るい黄色の花が咲きました

色とりどりの気持ちの花々 今日も心に咲いています

顔ぶれ色合いは変わるけど 毎日一面花盛り



「月の扉」

夜空に浮かぶ真円の月

星ひとつ見えない街明かりの中で

それでも白く光っている

あまりに丸くてあまりに白くて

まるで黒い壁にぼっかりと開いた穴のよう

もし本当にそうならば穴の向こうには

どんな景色が広がっているのか

何もない真っ白な世界？

他所の宇宙に繋がっている？

悪くはないかもしれないが

僕の望みは違っている

もしも月が穴ならば

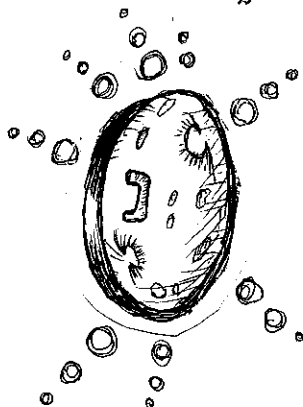
きつとそれは楽園の扉

誰もがいつか行きつける

幸せの國の入り口

そんな都合のいいことを

僕は心の底から願った



作・赤富士文兼 挿絵・水口萌恵

障害のある人の権利を守る

北障連から

① 歩みから

「障害児教育の砦」と言われた
与謝の海養護支援学校のある京

都北部の地、そこで50年以上に
渡って障害児者の生活と権利を

守り前進させる活動を進めて来

た「北障連」の歴史や、その果た
してきた役割、現在の取組を知っ

て頂きたいとの願いで、本紙に連
載することとなりました。また同

時に、その将来像について若い次
の世代と論議しながら作り上げ

障害児・者運動のバトン若い世代
に手渡していきたいと願ってい

ます。まずは、北障連について知
って頂くために、「北障連のあゆ

み」からです。

□1 北障連は、『与謝の海養護
学校』作りの取組みから誕生しま
した。

1951年、加悦町立桑飼小学
校に「特別学級」が設置される。

以後、各地に設置された特別学級

の保護者を中心に保護者会が組
織される。中学校特殊学校卒業後

の後期中等教育の保障として、ま
た重度の障害を負った子供達の

就学保障として養護学校作りの
取組へと発展しました。

1964年、養護学校作りの取
組が発展する過程で多くの組

織・団体と手を結び、養護学校設
置に向け『養護学校設置連絡協

会』結成され、京都府下で集会が

持たれました。1968年、京都

北部地域で開催された第二回北
部集会の場で、養護学校作りの取

組に結集した多くの団体・組織
をまとめ、障害児・者の権利と
生活を守る組織として京都障害
児・者の生活と権利を守る連絡
会（京障連）の北部組織として
『北障連』が結成され、翌19
69年に20年以上の運動で与謝
の海養護学校が開校しました。

（濱中 博）



障害児者を守る丹後与謝集会
（障害児にゆきとどいた教育と明
るい未来を）



「与謝の海養護学校」開校式



知っ得情報

介護（福祉）タクシー（下-2）

松本 美津男

〈宇治市〉

ブロン介護タクシー 090-7873-3294 介護サービスかしはら 0774-51-4527

四季オールサポート 0774-48-2336

ヒューネット安心介護タクシー 0774-26-3665

〈亀岡市〉

京都タクシー 0120-051-414 介護タクシー行来 0771-25-2454

〈福知山市〉

平成介護タクシー 0773-23-7707 福知山介護タクシー 0773-22-9057

ひかり介護タクシー 0773-24-1298

〈舞鶴市〉

キズナ介護タクシー 0120-257-655 京都タクシー 0773-62-1414

〈宇治田原町〉

ケアタクシーフリージャー 080-3838-5564

介護福祉タクシーあいちゃん 090-1142-6377

〈京丹後市〉

介護タクシーピース 0120-255-922

介護タクシーあい・うおーく 0772-82-2316

〈南丹市〉

アンシン福祉タクシー 0771-63-2123 南丹介護タクシー 0771-62-1489

〈木津川市〉

きづケアタクシー 0774-73-0156

最後に普通メーター料金で利用できるUD(ユニバーサルデザイン)車両を所有している代表的な会社を紹介します。

※慣れないドライバーの車に乗るときはかなり時間がかかることがあります。

ヤサカグループ 075-842-1212 都タクシー 075-661-6611

MKタクシー 075-778-4141

あなたもぜひ 仲間に



サロン・サークル・地域活動展開中
生活支援スタッフ(資格不要)募集中
介護職員(資格要)募集中

ひとりぼっちの高齢者をなくそう
元気な高齢者はもっと元気に

「よろず相談」承ります(随時)



あなたも支える存在に

京都市北区紫野東野町1-5
電話075-432-3636

命の平等をかけた、
無差別平等の医療と
福祉の実現をめざす

働くひとびとの医療機関です

看護師・薬剤師・医師や医療技術者を

目指す方をご紹介ください



京都民主医療機関連合会

〒615-0004 京都市右京区西院下花田町21-3 春日ビル4階

TEL 075-314-5011(代) FAX 075-314-5017

Home Page <http://www.kyoto-min-iren.org>

e-mail: info@kyoto-min-iren.org

【悼】 さよなら 矢吹さん

日本自立生活センター代表の矢吹文敏さんが亡くなりました。76歳だった。彼の著作の一つに本紙、の連載もとにして書かれた『車いす視点から社会を斬る一下から目線』（ウインかもがわ）がある。その「視点」の低さと「視点」の鋭さ、確かさに驚ろかされた。骨形成不全症という障害をもって生きてきた著者の「障害者論」でもあるが、同時にここに書かれているのは、「社会」であり、「政治」であり、「ひと」であり、「人生」だ。「障害者自立支援法」なる「自己責任」を押し付ける法律に異議を唱えるなど、この10年間余運動などを一緒に進めて来た身には喪失感が強い。

池添素さん（福祉広場理事長）が書いている。「矢吹文敏さんの文章を愉しみにしてきた。どんなお話が聞けるか、おやしギャグ満載間違いなし。いつもピリリと辛口でこの腹立たしい社会を一刀両断。本当は連載もこれぐらいで終了と行きたいところだと推察するのですが、次から次へと障害者のみならず、この国に住む人たちのことを置き去りにし、傷つけることばかり起こるので、やめるにやめられずここまで来たというのが本音ではないでしょうか。

矢吹さんは、「矢吹の目」で斬り、改善策、解決策、一言で言えば「もう一つの道」を指し示す。「憤懣」をぶつけるだけでなく、そこには「オールタナティブ」が用意されている。矢吹さんは『ひゅうまん京都』12月号で書いている。絶筆になった。＜世界中の人々がさまざまな悲哀を抱えたまま、新型コロナの年二〇二〇年が終わろうとしている。世界中の航空機が翼を休め、貿易量が激減し、各国の医療現場が崩壊し、わが国ではついに災害派遣と同じレベルで自衛隊の医療班が出動することとなった。それにしても、世界各国のコロナに対する考え方がこれ程明確に異なり、命に対する対応が驚くほど異なり、マスメディアの情報が想像以上に片寄っていることが明らかになり、世界の宗教がコロナの力に対してはほとんど無力であったという現実は、私にとっても大きなショックである。七六歳を越え、さまざまな基礎疾患を持ち、コロナに怯えて滅多に外へ出ることもなく、部屋の中にいる一人の障害者の言うことなど世界に届くわけもない。私自身、肝臓癌の数値も上がり、近いうちに余命宣告もあり得るのだが、訪問医療の先生には「今の状況で入院するのは嫌なので、在宅で逝きたい。」との要望を述べた。こんな中、トランプ大統領は「ワクチン接種を始めるが、米国国民を優先する」と明言した。新たな人種差別を想起する年末の不吉な言葉であった＞



ヤブキさんが愛用した車いすと帽子

井上吉郎（本紙編集長）